

修士論文（要旨）

2019年1月

21世紀を生きる日本語学習者同士の学びの可能性
- 自作ビデオ交換による遠隔協働学習プロジェクトの分析と考察 -

指導 宮副 ウォン 裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

215J3010

藤原 昂生

Master's Thesis (Abstract)

January 2019

Possibilities of Cooperative Learning among Students in 21st Century: A Practical Study on
Distance Learning with Producing and Exchanging Videos in Japanese

Akio Fujiwara

215J3010

Master's program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

目次

1章 はじめに	1
1.1 研究の背景.....	1
1.2 研究の目的.....	2
1.3 用語の定義.....	2
2章 先行研究	3
2.1 日本語教育における学習観の潮流.....	3
2.2 学習者主体の日本語教育.....	4
2.3 社会とのつながりを重視した日本語学習環境デザイン.....	5
2.4 複言語・複文化主義の日本語教育.....	8
2.5 ICTを使用した実践活動.....	10
3章 調査概要	12
3.1 実践活動概要.....	12
3.2 調査協力校の概要.....	13
3.3 ビデオプロジェクトについて.....	14
3.4 使用するデータと調査方法.....	20
4章 ビデオプロジェクトの活動分析	21
4.1 コメント数・活動分析について.....	21
4.2 事例1 「自己紹介」ビデオ.....	24
4.3 事例2 「大学紹介」ビデオ.....	27
4.4 事例3 「国紹介」ビデオ.....	30
5章 活動後調査	34
5.1 ビデオプロジェクト後調査概要.....	34
5.2 事後アンケート結果.....	35
5.3 振り返りレポート結果.....	38
6章 総合的考察	49
6.1 社会で行動するもの.....	49
6.2 参加者の学び.....	51
6.3 SNSを利用した日本語学習者同士の学習活動デザイン.....	53
7章 まとめと今後の課題	58
7.1 明らかになったこと.....	58
7.2 今後の課題.....	59

参考文献

複雑で変化の激しい 21 世紀社会を生きるために、学校教育や大学教育現場ではどのような知識、能力、資質を育成する必要があるのだろうか。アメリカの非営利団体「The Partnership for 21st Century Skills (21P)」を筆頭に、世界中の機関や組織で議論、研究が進められ、認知的な能力に加えた全人格的な能力の育成が教育文脈で重要視されている（久保田 2013）。このような教育現場での動きは、インターネットとモバイル・テクノロジーが普及し、人との関わり方だけでなく、異なる社会の交流が盛んになった今日の社会状況に呼応していると言える。広い教育領域の特定部分である日本語教育も例外ではなく、21 世紀の教育に求められている能力の育成を意識していくことが急務であると思われる（當作 2017）。

近年、日本語教育においても教室の枠を超え、社会とのつながりを意識した実践活動が行われるようになっており、特に、ソーシャルネットワーキングサービス（以下 SNS）を用いて、海外の教育機関に属している日本語学習者と日本語母語話者をつないだ実践活動はいくつか報告されている（小林 2016, 脊尾・天野 2017, 日木・Armstrong 2010 など）。その多くは、日本在住の日本語母語話者とつながることを目的とした言語学習活動である。しかし、コミュニケーションテクノロジーが発達し、言語使用場面や状況が多様化している 2018 年現在、言語学習の相手を母語話者に限定するのではなく、日本語学習者同士にも当て、グローバルな視点で言語学習を設定する必要があるのではないだろうか。多様な背景を持つ海外の日本語学習者同士をつなぎ、互いをリソースとした学び合いの場を作ることで、学びの場はさらに広がり、日本語实际使用の機会も増えるのではないかと考える。

そこで、本研究では海外の教育機関に属する日本語学習者同士を Facebook でつなぎ、異文化交流を目的とした「ビデオプロジェクト」という活動をデザインし、言語文化背景の異なる日本語学習者同士が参加する実践活動を試みた。以下の研究課題を解明することで、教室内日本語学習の枠を超えた日本語学習者同士の学びの可能性を明らかにし、SNS を利用することで 21 世紀を生きる日本語学習者にどのような言語教育の場を提供できるのかを探った。

【RQ1】

ビデオプロジェクト参加者は、言語使用者としてどのように活動に参加したのか。

【RQ2】

参加者は、ビデオプロジェクトを通じてどのような学びを得たのか。

【RQ3】

SNS を利用した実践活動は、日本語学習者同士の学びにどのような有用性があるのか。

実践の対象となったのは、北ヨーロッパにある A 国の A 大学に在籍する 1, 2 年生 13 名とタイの T 大学に在籍する 3, 4 年生の 15 名の日本語専攻の参加者であった。活動では、「自己紹介」、「大学紹介」、「国紹介」の 3 つのテーマで自作ビデオを制作し、Facebook 内の専用コミュニティでビデオについてやりとりをすることを活動内容とした。事後調査として、参加者全員を対象とした事後アンケート、振り返りレポート、フォローアップインタビューを実施した。

研究課題解明のため、【RQ1】では自作ビデオと活動内でのやりとりのデータを対象と

し、ヨーロッパ共通参照枠（Common European Framework of Reference : CEFR）の「行動中心アプローチ」の視点や New London Group（2001）の「デザイン（design）」の視点などを取り入れて分析を行った。【RQ2】，【RQ3】では、佐藤（2008）「質的データ分析法」を採用し、A 大学参加者の事後調査データに焦点を当てて分析・考察を行った。

自作ビデオの分析からは、日本語能力初級から初中級の参加者が非言語要素である写真、動画、音楽（特に BGM）, 演技といった「デザイン要素」をビデオ制作に取り入れ、日本語の限界を超え、伝えたい意味を構築していることがわかった。やりとりの分析からも、様々なネット媒体のリソースを利用し、限定的な日本語の壁を超え、果敢に日本語を使用する姿が見られ、彼らが経験と知識のある大人の言語使用者として活動に参加していることが明らかになった。事後調査の分析からは、A 大学参加者が同じく日本語学習者である T 大学参加者との交流を通じて、日本語使用者として目覚め、相互文化的な学びや日本語学習への新たな気づきを得ていることがわかり、SNS を利用した日本語学習者同士の学びに関する有用性の一端が明らかになった。

本研究の限界は、ビデオ分析において自作ビデオと活動内でのやりとりにのみ焦点を当てたため、参加者がどのようにビデオ制作に取り組んだのかといった一連のプロセスの解明には至らなかったことである。また、事後調査の分析も A 大学参加者のデータのみを対象としたこともあり、双方向からの学びを探ることが十分にはできなかった。今後は、双方の視点から日本語学習者同士の学びの可能性を検討していく必要がある。さらに、SNS を利用した日本語学習者同士の活動を継続的に行い、実践研究を蓄積し、日本語学習者同士の学びの効果や意義を実証的に研究していくことを今後の課題としたい。

参考文献

- 奥村三菜子・櫻井直子・鈴木裕子（編）（2016）『日本語教師のための CEFR』くろしお出版
- 久保田賢一（2013）「新しい能力」と学習環境デザイン」久保田賢一編（著）『高等教育におけるつながり・協働する学習環境デザイン - 大学生の能動的な学びを支援するソーシャルメディアの活用』序章，晃洋書房， pp.1-24.
- 小林久恵（2016）「コネチカットカレッジ日本語 201 ツイッタープロジェクト：21世紀のスキルの発達」『2016 CAJLE Annual Conference Proceedings』， 134-143.
- 佐伯胖（1998）「学習の「転移」から学ぶ - 転移の心理学から心理学の転移へ」佐伯胖・佐藤学・宮崎清孝・石黒広昭著『心理学と教育実践の間で』4章，東京大学出版会， pp.157-203.
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社
- 佐藤慎司・熊谷由理（編）（2011）『社会参加を目指す日本語教育 - 社会に関わる、つながる、働きかける - 』ひつじ書房
- 脊尾泰子・天野みどり（2017）「母語・非母語話者の括りを超えた日本語の学びの可能性 - 日加大学間での「日本語の学びを通して社会とつながるプロジェクト」の実践から - 」『2017 CAJLE Annual Conference Proceedings』， 224-231.
- 當作靖彦（2017）「グローバル時代のつながる日本語教育：ソーシャル・ネットワーキングアプローチ」『Journal CAJLE』18， 1-20.
- 當作靖彦（2014）『NIPPON 3.0 の処方箋』講談社
- 日木くるみ・Armstrong Elizabeth（2010）「関西外大 - バックネル大学 Facebook プロジェクト 2009 - Facebook を使った実践的コミュニケーションの試み - 」『関西外国語大学研究論集』92， 171-184.
- 細川英雄・尾辻恵美・マルチェッラ・マリオッティ（編）（2016）『市民成形性とことばの教育 - 母語・第二言語・外国語を超えて - 』くろしお出版
- 義永美央子（2009）「第二言語習得研究における社会的視点 - 認知的視点との比較と今後の展望 - 」『社会言語科学』第12巻，（1）， 15-31.
- 労軼琛・岩崎浩与司・齋藤里衣子・松浦恵子（2013）「非母語話者同士の学びを支える実践 - 韓国・中国・スウェーデンをつなぐ遠隔交流の試み - 」『日本語教育実研究フォーラム報告』2013年WEB版， 1-10.
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*, Cambridge: Cambridge University Press. (吉島茂・大橋理枝他(訳・編)(2004)『外国語教育 - 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)
- New London Group (2000) *A pedagogy of Multiliteracies: Desining Social Futures*. In B.Cope & M. Kalantzic (Eds.), *Multiliteracies: Literacy Learning and the Design of Social future*, pp. 9-37. New York: Routledge.

参考サイト

ATC21s 「21型スキル」〈<http://www.atc21s.org/>〉（2019年1月10日最終確認）